

かいたく

教会のない地域に教会を 刈り入れ場に働き人を



そこで、十一人は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のこぼれを後回しにしよう。食卓のことに仕えるのは良くありません。」
 (使徒の働き 六章二節)

「この国内宣教委員会は、日本バイブル・バプテスト・フエローシップの諸教会が行う国内開拓伝道を支援し、(国内宣教規約 第3条 目的)。同委員会の目的を果たしていくために、お任せしたいと願っていますが、何をどう支援したら良いのかわからずと改めて聖書に尋ねました。初代教会の開始当初、外部問題、内部問題が続き、(使徒 四・六章)、六章で二つの結論を得ています。教会の土台となる神のこぼれを土台とした位置に置かないということ(六章二・四節)。「こうして、キリストご自身が人々を使徒、ある人々を預言者、ある人々を伝道者、ある人々を牧師また教師として立てになりました。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げる。」(エペソ 四章十一・十二節)、「語るのであれば、神のこぼれにふさわしく語り、奉仕するのであれば、神が備えてくださる力によって、ふさわしく奉仕しなさい。」(1ペテロ 四章十一節)は、それに關連しています。聖書は、語る人、奉仕する人の順序を違えません。優秀ではなく、神のこぼれを土台とした教会の建て上げる方法における原則です。初代教会はその重要性に気づいたからこそ、「弟子たち全員を呼び集め」(六章二節)のことをし、その「提案は全員承認」(六章五節・第三版)としています。みことばの奉仕は専念しないと出来ないというのが聖書の主張です。「祈りと、みことば」(六章四節)の「祈り」も語るための祈りです。それはみことばを熟考するという見えない祈りでもあります。この奉仕は時間がいくらあっても、あり過ぎるといつかはあります。開拓期にみことばに専念することは現実的ではないと、状況に流されるのではなく、いかに専念できるか、伝道者自身が、教会が考えなければなりません。委員会もこの原則に従って諸教会にお任せします。

JBBF国内宣教委員会委員長・井口拓志

かいたく 2022年4月発行 第85号 発行元:JBBF国内宣教委員会 長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉4696-27 編集責任:井口拓志 デザイン:疋田健次

2021年度 国内宣教委員会一般会計収支報告

収入		支出	
献金	¥1,774,600	「かいたく」発行費	¥91,857
		カンファレンス費	¥80,000
		委員会議費・交通費	¥3,100
		慶弔費	¥30,000
		開拓伝道支援費	¥406,000
		事務費	¥32,728
		その他	¥40,000
収入合計	¥1,774,600	支出合計	¥683,685
前年度繰越金	¥1,473,753	次年度繰越金	¥2,564,668
合計	¥3,294,123	合計	¥3,294,123

開拓基金会計収支報告

収入		支出	
今年度献金	¥270,000	今年度貸付	¥1,000,000
今年度返済	¥120,000		
収入合計	¥390,000	支出合計	¥1,000,000
前年度繰越金	¥6,217,890	次年度繰越金	¥5,607,890
合計	¥6,717,890	合計	¥6,717,890

コロナ対応基金会計収支報告

収入		支出	
今年度献金	¥281,573	今年度支援金	¥930,000
一般会計より	¥0	事務費	¥1,500
収入合計	¥281,573	支出合計	¥931,500
前年度繰越金	¥1,218,092	次年度繰越金	¥568,165
合計	¥1,828,892	合計	¥1,828,892

皆様からの尊い 献げものに感謝いたします

2021年度の国内宣教委員会の会計報告は左記のとおりです。2021年度は通常の活動に加え、諸教会からお献げいただいたコロナ支援献金をもとに伝道所の先生方、神学生、お子様がいらっしゃる教役者世帯(独立教会含む)への支援を行うことができました。また、会堂用物件購入のための借り入れ申請があり、開拓基金より融資することができました。国内宣教委員会が担うこれらの働きは、諸教会の皆様からの尊い献げものによって成り立っています。私たちの群れの宣教の働きがさらに祝されるために、お祈りいただくと共に、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

ありがとうございました



就任のごあいさつ

足利聖書バプテスト教会:中川 克己



いつも足利教会のために尊いご祈りとサポートを賜り、心より主にあつて感謝しております。この度、国内宣教委員会の委員にいただきました。私自身は、開拓伝道したこともなく、働きの乏しい者ですので、このような責任ある働きに加わることに大変恐縮しました。むしろ、私自身が国内宣教委員会のお働きによって、本当に大きな助けをいただきました。足利教会の建物修繕に基金から融資していただきました。また、国保支援や、かいたく誌を通して、足利教会の必要を伝えていただいたりしました。今、このように足利の地で伝道が継続できているのは、第一に主御自身の御力であり、また多くの教会の祈りとサポートをいただいているからであり、そして国内宣教委員会の具体的な助けや励ましをいただいていることの大きさを覚えて感謝しております。そのような意味では、本来このようなお働きをさせていただけるような者ではありませんが、私自身助けていただいた身として、大変恐縮しつつ委員のお働きに加わらせていただくことになりました。

国内宣教は日本という独特の文化の中で地に足のついた伝道を広げて行く、大変重要な働きだと思っております。今まで積み重ねられて来た先輩の先生方のお働きの尊さを覚え、先輩の先生方から学びつつ、地域の伝道が力強くされていくための働きに少しでもあずかればと願っております。また、私が委員に加わることで、足利教会の兄弟もこの働きの重要性を考える機会とされ、受けるよりも献げる働きにあずかる幸いを少しでも覚える機会となればと願っております。まずは書記の働きをさせていただきつつ、仕事を覚えていくことから始まると思います。十分な働きができるようご支援いただければ感謝です。

00140・2・654375
 献金振込先(郵便振込)
 JBBF国内宣教委員会

退任のじあつわし

榎本 昌博（掛川聖書バプテスト教会）

有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。（Iコリント一章二八節）

はじめに

9年前に心の準備がない中で委員長に選出されました。たぶん、多くの方が心許ないと思われたでしょう。私には大きなプレッシャーがありました。しかし、皆様のご理解と有能な委員の先生方に支えられ、三期9年の務めを終えることができました。心より感謝いたします。

私ははじめて国内宣教委員会の働きに携わるようになったのは掛川教会に会堂が与えられた翌年の1997年でした。当時の委員長は私の牧師であり恩師である上田晃先生でした。それから約25年間の多くを国内宣教委員として活動させていただきました。

フルタイムになって

初めて国内宣教委員になったとき、私はそれまで勤めていたアルバイトを辞めてフルタイムになりました。その時の牧師給は10万円に満たない額でした。しかし、牧師の思いを受け止めてくれた教会は少しずつ牧師給の増額を図り、牧師の働きを支えてくれました。

掛川教会は一組の夫婦と当時はまだ独身だった私の3名で始まりました。そこに少しずつ教会員が加えられていきまし

たが、教会で重要な事柄を決めるときに兄弟姉妹たちの判断基準は、「〇〇兄が承諾されるなら」でした。そうした言葉に私は少しばかりのやっかみがありました。だが、牧師以外に信頼できる人が教会にいることは大きな助けであり、安定した運営の基です。牧師給が上げられたのもその兄弟が会計の務めを担っていたからです。

牧師以外の協力者

開拓伝道をはじめるときの必要要素の一つに、牧師を理解し支えてくれる協力者の存在があります。なぜなら、新しく加えられた方がお手本にするのは牧師ではなく自分と同じ信徒の立場にいる人だからです。開拓伝道を始めてもなかなか人が定着しない要因の一つは、そうした核になる信徒がいなかったことがあげられます。

また、牧師は決して完璧ではありません。むしろ様々な弱さや多くの欠けを持つています。信徒が少ないとそうした牧師の足りないところに集う人たちの目が向いてしまいます。しかし、信徒が増えようと関係が牧師中心ではなく信徒同士になっていき、それが牧師の足りない部分を補うようになります。私たち牧師は思い上がりせず、信徒の存在があつてこそ教会は成り立つことを覚悟しています。そして教会に集う人たちがいて牧師は多くの経験を積むことができ成長します。

伝道所の先生たちとのオンラインミーティング

昨年12月に伝道所の先生方4名と私でオンラインミーティングを持ち、率直な声を伺いました。先生方は20年以上も開拓伝道に従事されている方々ばかり。独立の目処は立たず、後継者がいるわけでもない中で、たとえ独立がかなわなくても、また賜物に乏しさを感じても、そこでの伝道を続けていこうという意志が伝わってきました。

私たちはとかく独立を求めたり促したりします。しかし、独立することだけが伝道の道ではないと思いますし、福音宣教に成功も失敗ありません。成功を求めすぎて失ってしまったことが沢山あるのではないのでしょうか。私たちは、無に等しい者が主によって遣わされているだけですが、支援する側にとって必要なことは、そうした伝道所をどのように支援できるのかを考え、交わりを通して、祈りを通して、励ましていくことではないのでしょうか。

国内宣教委員長を退任するにあたり

昭和の時代にできたことや通用したことが平成そして令和の時代には通用しません。これまでの成功体験がかえって妨げとなる敏感で神経質な難しい時代に私たちは生かされています。牧師には聖書

国内宣教カンファランス 2021

岡崎聖書バプテスト教会 疋田 健次

国内宣教委員会では毎年1月に国内宣教カンファランスを開催し、教役者の先生方およびご家族の交わりの場を提供してきました。しかし、2021年はコロナウイルスの影響が未知数だったこともあり、対面でのカンファランスは難しいと判断。代わりにリモート形式でのカンファランスを11月に開催いたしました。

今回のカンファランスでは大きく二つのプログラムを企画しました。第一に、5名の先生方による御言葉の取り次ぎ。第二に有志の先生方によるオンライン交わり会です。

御言葉の取り次ぎにおいては、「アフォーコロナ、ウイズコロナ」というテーマで榎本昌博先生（掛川BBC）と鹿毛愛喜先生（港北ニュータウンBBC）。「キリストとともに生きる伝道者の生活」というテーマでイ・ジェギ先生（サランBBC/韓国：通訳：東京聖書浸礼教



会の朴点得先生）とケン・ボード先生（2021年4月に小倉BBCよりアメリカへ帰国）。「伝道者の個人的課題と向き合う」というテーマで上山要先生（幕張BBC）がそれぞれ奉仕を担当。先生方が語られるメッセージをおして、多くの示唆をいただくことができました。コロナをきっかけとして時代は大きく変化してきています。このようななかで、私たちにも変化が求められています。「何とかして、何人かでも救うため」（Iコリント九章二二節）、私たちはこの時代の人々に御言葉を届けていかなければなりません。伝道の方法論においては、現在の状況下において、どのようなことができるか、たえず模索し続けていく必要があるでしょう。それと同時に、決して変えてはならないキリストの福音に私たちがますます根差していく必要性があることを示されました。

オンライン交わり会においては、諸教会から多くの先生方がご参加くださり、それぞれの教会が置かれている状況やコロナ下における取り組みなどを証ししてくださいました。疫病への対応という私たちがこれまで経験したことのない試練のなかにあつて、それぞれの教会が感染対策を取りながら、何とかして主の日の礼拝を死守しようとしている姿を伺うことができ、心熱くされました。また、今回の出来事をピンチではなくチャンスと捉え、新しい取り組みを始められている教会もあり、救われる方やバプテストを受けて教会に加えられる方が起こされているという幸いな証しも聞くことができました。

伝道所の紹介と証

今回のカンファランスに寄せられた国内にある伝道所の紹介と証の動画を国内宣教委員会のホームページで視聴することができます。覚えてお祈りください。

- ①瀬戸内教会
- ②千本浜教会
- ③甘木教会
- ④松江教会
- ⑤葛城教会

スマホはこちらから <http://jbbfhomemission.jp/pr.html>



榎本先生(写真右端)と国内宣教委員の先生方(2013年に実施した初めての伝道所訪問旅行の際の写真)

の知識や霊的に人々を導く力が求められますが、今の時代はそれ以外に様々なことへの配慮、時代を読み解く力、新しい知識、伝える力など多くの資質が求められます。そのようなことを求められると無に等しい自分にはとてもできないと思ってしまうでしょう。そして、傷つくことを嫌って、交わりから遠ざかりたくなることもあるでしょう。たしかにカンファレンスなどで他の牧師たちの説教を聞き、収穫の証を聞いたりすると、つい自分と比較して嫌な思いを持つことがあるでしょう。しかし、そうした思いを乗り越えて積極的に交わりに出てきてほしいと願っています。私はひとまず国内宣教委員会の働きから離れますが、引き続きそうした伝道所と先生方のことを心に留めて、祈りと支援をしていきたいと思っています。9年間、ありがとうございます。